
太陽と月と魔法と何かと何か！

giallo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

太陽と月と魔法と何かと何か！

【Nコード】

N1269K

【作者名】

gallo

【あらすじ】

え？うん？CHAOS ONLINE？世界の闇？ええ、もちろんそちらも書いてイキマスヨ？すいませんでしたー。脳内で世界観とキャラが構築されてしまったのでこの作品作ってしまいました。あらすじはまだまとみに作れる気がしません。簡単にだけ言うなら「魔法なファンタジーです。主人公はソルという青年とルナという少女です。」多分今はこんな感じです。

いち（前書き）

ふふふ、私は何をしてるんでしょうか。でも、仕方ないんですよ！
いきなり脳内で構築されていつて話がある程度できてしまつて・・・
このネタを捨てるのはモツタイナイデス。・・・ので作っちゃいま
した。

なんか最近後悔ばつかです。でもまあ作ってしまったからにはどれ
も完結させる予定です。

いち

「ん？どうした、お前。母さんと父さんはどうした？」

ローブを着た黒髪、黒目の青年は、ボロボロの布の服とも言えないものを纏った少女に声を掛けた。

「かあさんとうさんってなに？」

その少女は頭を傾げ、質問してくる。

「・・・あゝ、言葉理解してねーな・・・親はこの子を捨てたか？・・・見捨てられねーしな・・・」

青年は少女を再度見る。

少女は青年を見てキョトンとしていた。

青年は少女の頭を撫でた。

少女は気持ちよさそうに目を細めた。

「よし、俺と一緒に来ねーか？……こいつは……面白い魔力だな……。言葉わかんねーだったな……。連れてくか、こんな場所に置いてくよりやいいだろ」

青年は少女の頭を撫でるのをやめ、少女の手を握って歩きだした。

少女は撫でってくれる手を名残惜しそうに見たが自分の手を温もりが包み込んだ感覚が気持ち良くて青年について行った。

♪
♪
♪

「ししょーししょー」

僕は今、人里離れた森の中にぽつんとある自分の家で師匠を呼んだ。

「朝食できたよー！」

……。むう。起きてきこない。しかたがない起こしにいきますか。

少女はテーブルに朝食を並べてから、階段を上がり師匠と呼ばれる人の部屋の前まで来た。

コンコン

ノックをする。

「ししよー、朝食さめるよー？ソル？起きてる？」

・・・返事がない、爆睡中かな？・・・朝食がさめるからしかたないよね？

「入るよー」と言って少女はソルと言われる師匠の部屋へ入った。

部屋の中は本が山のように積み上がっていてベッドまでの道以外に足の踏み場がない。そして、ベッドには一人の黒髪の青年が静かな吐息を立てて寝ていた。

・・・ソルまだ寝てる・・・最近一緒に寝てないな・・・

そんなことを考えながら、顔に手を近づけると

ブウウン

「へ？」

突如として足元から魔法陣が展開され、魔法陣から光の紐が出てきて少女の手首、足首の部分を縛られ固定された。もちろん少女はそんな状態でまともに立つことが出来ず

「うにゃ〜」

ベッドの方に飛び込むように倒れた。

「…………あれ？」

が、いつまで経ってもベッドにぶつかった衝撃がこないの不思議に思い倒れる時つむった目を開く。

「あ…………ルナおはよう。で、これはどういう状況だ？」

ベッドで寝ていた黒髪の青年・・・ソルは身動きができないルナを抱きしめる形で受け止めていた。

・・・落ち着く・・・じゃなくて！

「ソル、朝食の準備できたよ！」

ルナは身体を起こそうとしたが手足を拘束されているので、顔だけ上げて用件を言った。

「ああ、そうか・・・じゃなくてだな、お？それって昨日俺が作った捕縛用の札か。・・・あゝ、それに掛かったのか。『我、光の拘束を解く。ルナの捕縛を解除せよ』・・・はい、これでよし。あと、魔法習ってる間は俺のことは師匠と呼ぶように言ってるだろ？」

ルナは手足が自由になって慌てて身を起こし

「はい、師匠・・・」

朝食はトーストとスクランブルエッグとベーコンが数枚に温野菜のサラダだ。目の前にいる黒髪、黒目の人は僕の命の恩人？で言葉や魔法について教えてくれたソル・・・ソル・シュライン。僕がスラムで一人できるところを拾ってくれたらしい。当時は6歳で言葉の意味を理解してなくて、拾ってくれてから言葉、礼儀、作法など生きる上で必要な事を教えてくれた。で、僕には名前が無かった・・・知らなかったたので「俺の名前は太陽だからお前は月な！今日からお前はルナ、ルナ・シュラインだ」という感じで僕の名前が決まった。でもまあこの名前は結構気に入っている。そんな訳で今は16歳、最近は家事もそつなくこなせるようになって、魔法をソル、うっん師匠に教えてもらってる。なんでか「魔法を教わる間は師匠と呼べ」って言われてる。なんでだろう？

「おゝい、ルナ？どうした？」

「！ふあい、なんですか？」

「何か、今日反応鈍く無いか？今日は村に行つてあの捕縛札売りに行くのと魔法の練習するからな？」

「はゝい！」

「元気だきゃいいな」とかばやきながら食べた朝食の皿を片付けていた。

♪♪♪

俺達は村まで降りた。村から家までたいした距離はない。今日は依頼された捕縛札の取引を行いに来た。隣にはルナがいる。こいつは俺が13の時に拾った子だ。あこで無視できるほどの人間じゃなかった俺はルナを連れて平和に今を暮らしている。

どれも木造建築、なのだが一軒だけ真っ黒な家がありそこへ入った。

カランカラン

ドアに付いていたベルが鳴った。

・・・・・・誰も出てこない

「おっい、来たぞっ」

人が出てくる気配がしなかったので俺はカウンターから声を掛けた。すると、奥の方からあらゆる服が真っ黒でさらに黒いローブ

を着て顔もフードで隠した女性・・・リサが現れた

「どうしたの？あらあら二人お揃いで・・・注文通り作った？」

ルナは「おはようございます、リサさん」と礼儀正しく挨拶した。

「おはようルナちゃん」と挨拶を交わし終えたのを見て、俺は「これでいいか？」と札を五枚出した。ちなみに今朝発動した札は試作品だ

「・・・上出来ね・・・さすが、というべきかしら？」

「・・・じゃあリーテウムの葉とモリビロンの根をくれ。これで取引終了だ」

札を吟味していたリサからもらうものをもらった。

「また何かあったら依頼させてもらうわ」

「ああ、わかった」

黒い家から出てすぐに

「ししょー、リーテウムの葉って何に使うんですか？」

リーテウムの葉・・・モリビロンの根の使い道は前に教えたから聞かないのか・・・

「リーテウムの葉はな魔力増強に使えるんだ。ここらへんには無いものだからなああいうところじゃないと手に入らないんだ」

「へー」とルナは納得したように頷いた。

ルナは初めてあつた時、異様な魔力を持っていることに俺は気がついた。本人は全然分らない・・・いや、多分俺のレベルの間じゃないとこの歪みは気づかないだろう。まあ、今は特に問題はないが・・・

「じゃあ用事も済んだし、魔法の練習をするぞ」

「はい！」

♪
♪
♪

「今日は魔力探知、及び魔力量の計測だ。」

今は森の中

「これから出す土人形ゴーレムは常に魔力を放出し続ける。今日はこいつらの場所とどいつが1番魔力を持っていれか当ててくれじゃあ」大地よ、器に生命を吹き込みたまえ」《プチゴーレム》出てこい！」

師匠が精製したのは《プチゴーレム》見た目はウサギの人形見たいで可愛いけど、ソルの大量の魔力を凝縮されたゴーレム達はありません速度で動きだす。

「・・・じゃあカウントするから・・・3・・・2・・・1・・・はい。」

「3時方向300m先に一匹、2時方向140m先に一匹・・・」

ちなみに僕は今目隠しされてて魔力探知のみでゴーレム達を見つけてる。

「・・・8時の方向、150m先に一匹・・・これで最後です。」

「じゃあ、その中で1番魔力量が高かったものは？」

「2時方向のです」

「じゃあ、2番目は？」

「ふえ？あ……え、どっち？」

「……はい、残念。まったく……氣い抜いただろ？」

「だって、1番魔力量高いのって初めに言っただじゃないですか」

「あほう、1番だけわかったぐらいでいい氣になっているか調べたが案の定わかって一息ついたな！だいたい魔力量の全部のわずかな差がわかるレベルに到達しないと俺みたくはなねーぜ？」

「う〜〜〜」

「唸るな、……ルナ！お前はここにいる。すぐ戻ってくる『風よ、私に加護を』《シルフ》」

ソルの顔が変わった・・・何かあったのかな？《シルフ》使わないといけない場所ってどこだろう？

♪
♪
♪

なんだ？まあまあ大きい魔力を持ったやつが戦ってやがる。
こんな辺境でドンパチ起こすやつは誰だ？

ソルは森の中の木々をかい潜り高速に移動していた。

「・・・・・・・・・・？あいつらか？」

ソルは立ち止まり、木の陰から三人の人影を覗いた。二人は黒い鎧を着た人ともう一人はまったく正反対の白い鎧を着た人が向かい合って闘っていた。

「うおっ、パラディン聖騎士にダークナイト暗黒騎士じゃん。ホントなんでこんな所にこんなやつらなんだよ」

パラディンとは、聖王領・聖アルビド王国で選ばれた者だけになれる魔法騎士。専用の純白の鎧がその証だ。対してダークナイト

は、帝国領・武攻国家ハイエンド帝国でのパラディンと同じ役職だ。こちらは全身黒の装備で固めている。

だがだいたいこの両者は国の領土の守備及び王の護衛が任務であるはずだが

「なぐんでここにいんのかね」

ソルには分からない。だがそんなことを考えているソルにはお構いなく聖騎士と暗黒騎士は闘い続けている。

ん？どうしたものか、ここらを戦場にはして欲しくないんだが・・・だいたい相反するこの二騎士は絶対闘いをやめねーしな・・・止めるか？だったら聖騎士の方でも助けてやろうかな？二対一はなんでも卑怯だしつかもう聖騎士の方負けそうだし・・・んじゃ、いっちょ行きますか

♪
♪
♪

「《フレアランス》」
「《アクアランス》」

炎の槍と水の槍は互いにぶつかり合い消滅する。

「そろそろ死んでくれねーか？いい加減そっちに勝ち目はないぐらいわかるんじゃないのか？パラディンよー！？」

確かにそのとおりである。帝国領の優秀な騎士であるダークナイトが二人も同時に相手をする事自体が無謀なのだが逃げ切る自信すらないから真っ向から闘った結果この様だ。私は王からの『特務』によりこの辺境まで着たのだが何故こいつらはここにいます？

「無駄口叩くよりとつと済ませるぞ、任務はまだ終わってないんだ。一気に片を付けるぞ」

「オーケー、もう少し痛み付けたかったがこれで終わりじゃないからな」

二人の暗黒騎士が詠唱し始めた。始めから全力でいった私にはもう魔力が残されていない・・・死んだかな？

「《ゲイルショット》」「《アイシクルエッジ》」

抵抗するのを諦めた私は目をつむった。

・・・・・・？

いつまでも衝撃がこない。訳がわからず目を開け前を見た、目の前には暗黒騎士二人ともう一人黒髪の青年がいた

「よう、大丈夫か？」

私は、それを見て視界がぐにやりと歪み意識を失った。

♪
♪
♪

ありや？気絶でもしたか？一瞬俺を見たような気はするが・・・

「おい、てめえ何もんだ！部外者がいきなり割り込んでんじゃねーよ！」

「・・・いやいや、ここで闘ってもらったら困る側の人だし。むしろ俺にとって部外者はあんた達だし」

「お前、誰に口ごたえしてんのかわかってんのか！あ？」

「おい、レッズ落ち着け」

妙に突っ掛かる奴をもう一人が止めようとしたが

「うつせーよ、それにそいつの後ろのパラディンを庇ったんだ。だからそいつも同罪だろ、やってしまってもかまわねーだろ！」

ホントこっとう奴ってうざいよな、自己チューな奴

「ああ？なんだと？」

おっと口にしてしまっていたようだ・・・うわあやる気満々じゃねーか・・・はあ、まあどうせ最後は実力行使で追っ払うつもりだったしいいか

「てめえ、そこ動くなよ！」水よ、大きな槍となりて奴を貫けええええ！」《アクアランス》！」

動くなだつてさ、だいたい魔法構築がいびつなそんな魔法躲すまでもないな

「『我の意志に従え、光よ彼に裁きを与えよ』《ディバイン》」

属性は光、そこらにある光を一点に集中させ光線を放つ魔法。

水の槍は光に飲み込まれ

「は？なん・・・」

言葉を言い切る前にその雑魚を消し飛ばした。小さなクレイターが出来た。少しだけ森の木々が揺れる。

「・・・で、お前さんはどうする？見た感じあっちよか話通じそうだけど？」

もう一人の暗黒騎士に言った。まったく殺気がない。

「ええ、見逃してもらえるのであれば逃げさせてもらうのですが。私の任務は多分あなたに用がありますので・・・あなたはソル・シュラインですか？」

暗黒騎士が俺に何の用なんだろうな・・・いい予感がまったくしねーな

いち（後書き）

さあ、ソルの見方を変えよう。

『かわいそうな少女を保護した』

↓ 『幼女を拉致した！』

とんだ変態ですね！

にー（前書き）

ふむ、こっち先更新する前にCHAOS ONLINE更新しろよ！という苦情は一切受け付けます。いや、だってマジミスったとは思ってますし。

に――

「あなたはソル・シュラインじゃありませんか？」

・・・？俺に用か？

「ああ、そうだが？俺なんかやったっけ？」

暗黒騎士は首を横に降った。

「いいえ、特に帝国に害をなすようなことはしてませんよ・・・

」

一瞬だけソルは俺実は犯罪者だったか？と自分を疑ったが暗黒騎士の言葉に安堵した。が、まだ暗黒騎士の言葉は続いていた。

「・・・ただあなたは過去に『黒雷の魔術師』と呼ばれて帝国領にも聖王領にも力を貸した伝説級の人間じゃないですか？」

あゝそれは俺が12の時に若気の至りで「俺、無双！」とかやって・・・俺はずかしっ！

「・・・で用つてのは、ライト王子・・・いや今は帝王陛下か？からの用件か？」

暗黒騎士は頷いた。

「実は・・・」

「いや、待った！その話は俺の家で聞こう。・・・んで、悪いが信用してないわけじゃないが《刻印》を刻ませてくれ、内容は治癒魔法意外は唱えられないというものだ。解除は俺の任意もしくは・・・この先は言わなくてもわかるか」

術者の死、優秀な魔術師である暗黒騎士じゃなくても魔法使いならだれでも知っている。

暗黒騎士は少し悩んでいたが「そうしないと信用しないのですね？それに私はこの任務をこなさないと帰るに帰れませんから」と言って承諾した。

「じゃあ、失礼」と言つて俺はその暗黒騎士の手甲を外してもらい手の甲に《刻印》を刻ませてもらった。《刻印》の刻み方は至って簡単、魔力の塊を線にして必要な情報を植え付けた紋様にして相手の生身の部分に付着させる。

「少し痛いですね。」と暗黒騎士の少年・・・少年かよ！

「お前歳は？」気になったので聞いた。

「ああ、申し遅れました。暗黒騎士第一部隊副隊長、カケル・キサラギという者です。今年で16です。」

16歳か・・・若いな、それで今は暗黒騎士の副長クラス将来有望だな。俺が16の時はあいつに確か水が怖いものじゃないことを・・・今はそれはいいとして・・・ヤベー、ルナのこと忘れてたー！

「おう、わかった。少しの間だがよろしく、タケル！んで、ちよっと忘れてたことがあったんだわ・・・こっちのパラディンどうしようか」

金色の髪が長い少女・・・少女！また若い子供かよ！つかタケル達容赦ねーなー女の子に手を上げるとは・・・さうて、どうしようか・・・よし、この子にも《刻印》刻んで連れてくか・・・

ソルは少女の鎧を外しひどい外傷がないか調べその後タケルの

時と同じように《刻印》を刻んだ。《刻印》を刻まれると一瞬だが熱がくわるので少女は「ん！・・・」という声を上げたがまだ眠りにっている。

「タケル、この子も連れてくぞ？後、これは俺から言いたいことだが男が女に手を挙げるのは男としてやっちゃいけないぜ？」

「帝国に逆らわなければ私はそんなことをしません・・・あと、私はほとんど何もしてません。あいつがいきなり襲っただけなので・・・」

悲しいねー、子供にこんなことさせるこの世界が・・・さてと、行きますか

- - - - -

遅いなあ、ここで待てって言って、すぐ戻ってくるって言ったのソルじゃん・・・あ！魔力探知使えば近くにすればわかるじゃん！

魔力探知による距離を延ばして行くルナ。そして

・・・あ！この感じはソル！と？あれ？なんか魔力持つ

た人二人いる・・・あれ？一人ソルと重なってない！？

魔力探知によって三人の魔力に気がついた。ルナは初めて感じる魔力の質が二つあることに気がついた。そして感じから一つはソルの魔力のすぐ近くにあることまで探知した。

・・・そろそろ見えるはず・・・あ！ソル！・・・
が何か知らない女の子お姫様抱っこしてるーーーー！誰、あの子！
？と、とりあえずソルに声を掛けよう。あれ？もう一人黒色の人がいる・・・まっいいかそんなこと

「ソルーーーーー！」

こっちにソルが真っ直ぐ向かってくる。アノコハダレ？

「おう、ルナ悪いこの子着替えさせるのと傷とかないか確認してくれ。もしあったら俺に言ってくれ！じゃあ、全員そろったから転移札使って帰るぞ。ルナ俺のポケットから出して使ってくれ」

早口にソルにそう言われて質問する暇を与えられなかった。しかたないのでソルの腰に吊ってる札入れ用のポーチから取り出し転移札を空高く投げた。

高く上がった札から何本もの光の線が降りてきて光の門が出来た。ここをくぐると指定した場所に転移する、もちろん行き先は僕達の家。

・・・師匠と呼べっていうのなかったな・・・

- - - - -

俺達は家に帰ってきた。ルナはあの子の看病をしてくれている・
・今のところまだ起きない。どうやらかなりお疲れだったようだ。

で、俺は今タケルと向かい合わせで用を確認していた。

「おう、待たせたな・・・でライト皇帝陛下が何だつて？」

俺が『黒雷の魔術師』と呼ばれていた時は金を稼ぐために一生懸命で傭兵をしていたが帝国領にいる際に王子の護衛の任務をその時の帝王が直々に依頼してきたから引き受けた。んでその時に護衛したのがライト王子。いやゝライト王子って意外とすごかったんだよなゝまさか俺の・・・・・・ダメだすぐに昔話ばかりしてしまう・
・俺もっ年か？

「ええ、陛下から伝言があります。その前にこの質問を答えて

もらえますか？」

「ん？・・・おう」なんだ質問って。

「じゃあ今から言う合言葉を言ってください。『ミラクル・マジカル・・・』」

「・・・プリティちゃん」・・・ライトに言いたい事ができた。俺から言わせてくれ、スマン。」

その合言葉を言ったタケルは疲れた顔をしていた。だが、これでタケルが信用にたる人間だと言うことがわかった。

「お前はライトとはどういう関係なんだ？えらく信用されてるじゃねーか」

「・・・ライトさんは命の恩人であり、義父さんです。父も母もいなかった私に救いの手を差し延べてくれた人です」

ほーう、ライトも子供拾ったのか・・・ぜってーうちの子の方がいい子だけだな！・・・身内を使って俺に伝言ってなんだ？

「・・・失礼しました。伝言があります。この札に音声記録されてます。一度使くと自然消滅するようになってます。なので、私も内容は知りません・・・」

タケルは俺に札を渡した。俺は札を発動させた。

『よう、ブラザー元気にしてるかー？』

ライトの声流れ始めた

にー（後書き）

お姫様抱っこですってールナの嫉妬が可愛いんですけどー

・・・・・さて、全然余裕がないですね。ストック生産に忙しいる！忙しくしたのは誰だー！私だー！

修正：タケルの年齢を14↓16にしました。もう読んでしまった方すみません。

さん（前書き）

ダメだこっち書くの楽しすぎてカオスと世界の方全然執筆進まない！

さん

『よう、ブラザー元気にしてるかー？』

ああ、元気にしてるぜ

『よう、ブラザー元気にしてるかー？』

ああ、元気にしてるぜ

『よう、ブラザー元気にしてるかー？』

．．．．．

『重要なことなので三回言いました』

うぜえよ！しかもそこは普通二回だろ！だいたい読者がみたら何かのミスか何かに思われるぞ！つかぜってー最後にwwwが付いてただろ今の！

『今心の中で突っ込んだな？突っ込んだな？やーい、俺の勝ち。』

ザマー』

「……………なあ、タケルこれ破り捨てていいか？なあ！なあ！？」

これはあくまで記録した音声を流すもので一度記録した音声しか流せない。つまり、ここまで見越して音声を記録させたわけだ……………次会ったらぜってー殴る、顔面に！

「……………破っていいでしょうか」

タケルまで破ろうとしたー！いや、気持ちはわかるけど君が破いたらダメだろ！

『待てー待ってくれー。今のはほんのジョーク多分タケルが破ろうとしてるはずだからソル止めてくれー』

大丈夫あんたのタケルは……………

「落ち着けー！今の聞いてなかったのか？マジ落ち着け、絶対破っちゃダメだー」

危ねー、今かなり危険なところまで行くところだった今魔法が使えないからってそこにあるハサミで切ろうとするとは・・・

『そろそろ、タケルは落ち着いたころじゃないか？これから真面目な話をするから・・・いやホントに今おまえら疑っただろ』

なかなか読みが鋭いな・・・相変わらずうぜえ

『じゃあ、ここからマジで話す・・・あとのこととは絶対に誰にも言ってはいかん。タケルの回りの人間はとくにダメだ。では始める。』

・・・嫌だねえ、絶対帝国内なごたごただろうに・・・

『まず、今私の国は聖アルビド王国と戦争状態にあるのは知っているな？実はなー情けない事に多分この戦争のキツカケと元凶はすべてうちの宰相にあるようだ』

ほら来た、んでこの後は・・・

『でも、俺にはこの宰相を調べる術が無い。タケルを使っても多分変な罪を着せられて犯罪者扱いされるのが目に見えてる・・・そこでだ、お前に宰相について調べてもらいたい。』

いや、俺探偵とかじゃないんでそんな調査依頼とか無理だし

『が、お前に調査とか無理だと思ったので宰相側にスパイを入れておいた。で、これから向かう場所は調べておいた。聖王領の白銀山、王家しか入れない場所だ。こんな場所に行くのは怪しすぎるというより何かあるとしか考えられない。そういうわけで宰相消しといて、そのカケル連れてっていいから』

……つか、これ俺に何のメリットも無くね？

『で、今多分お前はこれに対して自分へのメリットは？とか思った
だろ？大丈夫だ、お前は何がなんでもやらなくてはならない』

は？いやいや、意味がわからないのだが

『お前が宰相消さないと俺がお前の名前残して自殺してやる！どう
だ？もしそんなことしたら国民達の目は誰に向かうだろうな』

……さすが王、民のためならなんでもやるな……でもなあ、
ルナがいるしな……あー、でもこの依頼達成したらルナ
の両親見つけられるかもな……

『まあ、代わりにちゃんと消したら無理がないくらいには何か叶えてやる……これで引き受けてくれないか？……では、これで記録は終わる。まあ、この依頼を受けるも受けないもお前次第だ。じゃあな良い知らせが聞けることを待ってるよ』

・・・よし、決定。まあ、ルナがいたスラムは国境付近だったからどちら側の人間かは分からないがもし帝国の人間なら見つかるかもしれない。

「カケル、俺はこの依頼を受けるぜ。」

「これからはよろしくお願いしますシュラインさん」

「シュラインだとルナもいるからな俺のことはソルでいい」

「わかりました、ソルさん」

いやあ、ソルでいいっていうのはソルで呼び捨てでいいって意味だったんだが……まあいいか

- - - - -

「んっ………?」

ここはどこでしょう？見知らぬベッド寝てる？あれ、私はなん
でこんなことに？

「おゝ目え醒ましたか」

ん？この人は・・・あ、たしかあの時・・・！

「あつ、あの！」

「んゝどうした？」

「暗黒騎士はどうしました？ここはどこですか？いえ、それよ
りもあなたはだれですか？」

・・・うわあ、私何パニックってるんだろ。質問がぐちゃぐ
ちゃ・・・

「・・・ひとつずつ解決していこうか。まず俺の名前はソル、
ソル・シュラインだ。さっきまでルナが看病してくれてたんだがお
いおい紹介するとして、君はなんて名前だ？」

「私は・・・リインです。見ての通りパラディンです。・・・でした。」

「でした？」

確かに私はパラディンだった『あいつ』に嵌められなければ・

「・・・まあ、言いたくないのなら構わないが・・・ん
じゃ他の質問を消費してくぜ」

・・・あれ？ソル、ソル・シュライン？何か最近聞いたような・

「まず、ここは俺の家だ。で、君を助けて看病してやった。ここまでオーケー？」

「はい・・・ありがとうございます」

やっぱりこの人に助けてもらったようだ・・・あれ、ということとはあのダークナイト二人を撃退したの？え？この人何者？

「んで多分そろそろ頭の整理が出来てきたころだろう・・・まず、あのダークナイトのうちの君をしつこく攻撃したほうは俺が塵にした。つーか跡形もないか。んでもう一人はこの家にいる」

！え？この人敵？ここにダークナイトいるの？逃げなくちゃ

「『私の元に、光よ集まれ』・・・アレ？」

魔力が上手く練れない！なんで？

「うん、なんつーか《刻印》刻んとしてよかったな・・・」

へ？《刻印》？・・・あ、手にある・・・魔法使えないよ！どうしよう・・・

「おい、落ち着け。まず俺の話を聞け！・・・・・・・・・・落ち着いたか？実は・・・」

- - - - -

・・・いや、いくらタケルが大丈夫という説明をするためとは

言えすべてを話すわけじゃないぞ？悪の宰相を倒す正義の味方、みたいな感じに伝えた訳だが・・・

「タケルさん、カッコイイですね。いまどきそんな人がいるんですね！」

脚色しすぎちまった、つかこんな理由信じてるこいつは多分馬鹿

「あ、ああ。でだ君は「リンと呼んでください！」リンはここに何しに来たんだ？」

やっと本題に入れた・・・さうて何用なんだろうな

「ああ！そういえば、私ママの頼みごとを・・・すみません『黒雷の魔術師』って方知りませんか？何か大層な二つ名ですよね、でも本当の名前忘れちゃったんですよ。あれ？どうしたんですか？ソルさん？・・・アレ？ソル・シュライン・・・あー！あなたがソル・シュラインさんですか、あの『黒雷の魔術師』の！」

今日厄日だよ、俺もう厄介ごとイヤダヨ・・・ちきしょー次は何だー！聖王領の知り合いにも心当たり有りすぎていやだー！

さん（後書き）

ソル「先生、もう一人の主人公であるルナが出て来ませーん。」

大丈夫、次には出てくるはずだから・・・というよりもだねCHAOS ONLINEと同じノリであとがきに出てくるフリーダムなソルさんCHAOS ONLINE以外のあとがきは私のスペースですよ？

ソル「はっ！俺をさんざん陥れといて何の謝罪もないのかよ！」

すみません・・・？何で私が謝らなきゃならないんでしょうか？

よん or し (前書き)

いきなり短い・・・だって区切りがよかったから！
・・・言い訳す

よんおし

「・・・で、俺に何のようだ？」

ぶつちゃけ聞きたくもないが俺は困っている人を見捨てられるほどの人間じゃない・・・ああ！お人よしさ、自覚もしてるさ！

「え〜つとですね・・・これを聞いてもらえますか？音声記録用の札なんですけど一回使つと自然消滅するんですよ」

・・・あれ？デジャヴュ？さっきもこの展開あつたぞ？

「ソルさんどうしたんですか？大丈夫ですか？」

「いや、大丈夫軽くめまいがただけだ・・・・・・ちよつと待て！合言葉とかあるか？」

「え？・・・あつ！ありますね。なんでそんなこと分かつたんですか？」

「いや、そんなことはいいから合言葉は何？」

「えつと、『アリシズムとは・・・』」

「私の物は私の物、あんたの物も私の物」・・・」

まったくなんだよ！どこのジャイオンだよ。誰かは分かったけどや。

「うわあ、本当に知ってるんですね。こんな合言葉通じるはずないと思っていたんですけどね」

「・・・俺その札の内容聞かなくていいか？もう今日はダメだ何て言つか精神的に・・・」

「え、なるべく早く聞いて欲しいです。ママに殺されますー」

リンの目がかなり必死だ・・・俺だつてやだー！

「明日にしてください。お願いします！」（土下座してます）

今日はもう厄介事は聞きたくない！

「ソルーって、あれ？なんで土下座してるの？」

ルナが入ってきた。いや、ナイスタイミング。

「ルナ！あとはまかせた！」

三十六計逃げるにせず、だ・・・これ使いどきなかなかないよな・
・

♪♪♪

ソル・・・まかせたって、何を！？

目の前には同い年ぐらいの女の子、蒼い髪、蒼い目同性の僕も見とれしまうぐらいに綺麗・・・この人と何があっただらろう？と
りあえず話してみよう。

「はじめまして、ルナって言います」

「あ！失礼しました。私はリンと言います。すみません怪我の看病してくれたんですね？ソルさんから聞きました」

「いえいえ、たいしたことはしてないので・・・リンさんソ
ルと何を話していたんですか？」

「えつと・・・何て言えばいいでしょうか？」

「え、僕に言われても・・・」

・・・この子との会話もう止まりそう。というより何でリン
さん疑問に疑問で返してくるの！

「そうですね、ソルさんどこですか？ソルさんにこれ聞いても
らわないと困るんです！」

いきなりソル要求してきた！この人ちょっと分からないよ！ソ
ル！助けて・・・はっ！だからさっき逃げるようにして出て行っ
たのか！

「ルナさん、ルナさん」

「ふあ、はい！」

「ソルさんどこにいますか？」

「え、ちょっとわかりませんね・・・あつ、どうしました？」

リインはいきなり立ち上がった。

「あつちがこないなら私が行きます！例え、いなくても探します！」

え？何かリインさんの後ろに炎が出てるように見えるんだけど、何かに火が点いた感じ・・・ソル、任せたって言われたけど僕にも無理でした・・・

♪
♪
♪

・・・とりあえず、俺はルナに任せて今は自室。タケルには部屋一つ貸してそこにいるはずだ。帝国領問題（なんか名称ないと不便だから今決めた）は噂の宰相さんが聖王領に行くのはまだ先の話だからとりあえず一週間ぐらいはまだここにいてもいい。ただ、リインがどんな厄介事かが問題だ・・・ん？廊下の方が騒がしいな・・・

「えつと・・・ソルの部屋はここですけど、普段は無断で入るなって・・・」

「致し方ありません！強行突破です！」

え？何？リンなんでいんの？つーかもう部屋の前？

ガチャガチャ

「鍵が閉まってます！」

助かったぜ、滅多に使わない鍵が思わぬ形で・・・

「ルナさん！ヘアピン持ってませんか？」

「え？・・・ちょうど今二つ持ってますけどあつ、」

「ごめんなさい、ダメにするけど今度弁償するね。今はこつち
！」

カチャカチャ・・・カチャカチャ・・・カチャガチャ！

なんでピッキングなんて技術持つてるんですかー、魔法使えないと安心してたのにわードア開いたー

「ソルさん！この内容確かめてください。じゃないと私が殺されます！」

殺されるって大袈裟・・・じゃないなマジだろうなあいつなら・・・

「・・・はあー、もうわかったよ。聞くよ・・・ルナ、タケル呼んで来てくれないか？多分今後の行動にも影響するかもしれないから」

さて、平和な毎日は今日で終わりかな。

よん or し（後書き）

あれ〜？あとがき部分が一番好きなのに何のネタも思いつかない・・

ソル「いや、そこで俺を無理矢理だしてもダメだろ」

ネタに困ったらキャラにまかせる。コレジョウシキ

ソル「嘘つけ！てめー最後の方棒読みじゃねーか！」

少しぐらいあとがきに付き合ってくれてもいいじゃないですか

ソル「いやだ〜俺はもう厄介事はゴメンだ」

はっ、今私の機嫌取っておかなくていいのか？私が不機嫌だといひ面倒事を・・・

ソル「てめー、ちきしょー、鬼ー、鬼畜ー。俺の平和かえせー」

いやー、便利なソルさんでしたー。パチパチ

ソル「は？ここで終わらせんの？いや、ちよっ・・・」

ふう、意外と字数稼げましたね。ではみなさん次回（笑）もお楽しみに！

1 (前書き)

うぬーん、執筆が進まない。さらには文章量も少ない・・・(ネット
ゲーやってたなんて言えないっ!)・・・すいませんでした
！。

こ

「どうも初めまして、タケルと申します。先ほどはすいませんでした」

「え？あつ、はい。リンです。初めまして」

なんつーか、タケルしっかりしてるな。ライトに育てられたとは思えんな

「じゃあ自己紹介も終わったことだし。さっそく聞こうか」

まあ、なんだかんだ言っただけ厄介事に自分から首突っ込んでるんだが

「はい・・・って、ソルさん聞く気あります？」

ちつ、俺が気配消して逃げようとするところを気づくとは

「もちろんだ、逃げようなんて考えるはずがない！ああ、そうとも」

「・・・じゃあ始めますよ」

札の術式が展開される。

『・・・あ、これもう記録してる？』

始まった・・・つか使い方を把握しとけよ

♪
♪
♪

女の人の声、今リインさんが持ってた音声記録用の札を再生しています。部屋にはソル、リインさん、タケルさん、そして僕がいます・・・何か大事な話だから聞けって言われたから聞いてます。でもさ、よく分からないよね。だってリインさんは聖王領のパラディンでタケルさんは帝国領のダークナイト。この二つって水と油みたいな物だったはずんだけどなんでかな？非常に和んでる。

『えっと、ソル元気？うーんこれはおかしいかな。とりあえず11年ぶりでしょうか。こちらは今もかわらず王女やっています。』

・・・え？ソルって聖アルビド王国の王女様と知り合いなの？

『少しは昔話もしたいですけどそうも言ってられません。実はアルビド王家が代々守ってきている白銀山に調査隊を出すという話があるんですけど』

ん？タケルさんの顔が少し反応した？あ、ソルも

『ただ、調査隊を出すだけなら何の問題にもならないのですけど帝国の人を秘密裏に白銀山へ入れるらしいです・・・私が持っている手駒でいろいろ調べましたが私の母、女王陛下がその帝国の人と何かをするらしいです。この記録が終わってリインに届けさせたら私はお母さんに進言するつもりです。ですのでこの話を聞いている頃には私はどうなっているかわかりません・・・リイン、多分あなたはもうパラディンを追放されているかもしれません。今後はソルさんと共に行動しなさい。ソルさん、あなたは一度私を救ってくれました。本当に申し訳ありませんがもう一度だけ力を貸してください。』

「私からもお願いします」

王女救ったの？ソルが？

「いいよ」

あっさり承諾した！

♪
♪
♪

だいたいあれだ、どう考えてもこうなりそうだったのは明白だ

「ソルさん、どうやら聖王領も同じ状況なんですね」

「ああ、つーわけで一週間後に聖アルビド王国の都心部に行くわ・・・ルナ、着いてくるか？」

正直言つて俺がこいつらの力になってやりたいが、ルナだけが気掛かりだ。ルナにだって分かるはずだこれからやることはかなり危ない橋を渡ることを

「え？ソル、僕を置いてけぼりにするの・・・ウルウル」

がはっ！上目使い＋涙目だ、と

「置いてくはずじゃないか。うん、一緒に行こう」

・・・はっ！俺は今何を？

こうして、聖王国へ行くことになったがいろいろ準備するのに一週間は家にいることにした・・・家には二人増えた。

♪
♪
♪

「ほぅ、リインもアリスに拾われて育てられたのか」

今は夕食時。あ、ちなみにアリスってさっきの王女な

「はい、というよりもですね。さっきのママの口調違ってたね」

「ああ、そうだな。少なくとも昔会った時はかなりな駄々っ子お嬢様だったな・・・って今もそうなのか？」

「昔は知りませんがママは・・・ガタガタブルブル」

「ふえ？リインさん落ち着いて！」

「そついえばタケル、ライトは今はどうな感じだ？」

「立派な王ですよ・・・あんな感じの状態は表には出してませんので・・・はあ」

とまあ、こんな感じに四人で会話を楽しんで（俺だけか？）一日は過ぎていった

♪
♪
♪

カランカラン

今日始めに行った場所、リサの店。この小さくも大きくもない集落唯一の薬屋兼俺に仕事をくれる場所。

「お、いたのか」

「何言ってるのここは私の店よ？私がいはいはすないじゃない」

「俺はまたあっちへ行くようだ」

「・・・そう」

微かに顔が歪んだ・・・ように見えた。

「リサ今まで助かった・・・一週間後には発つ・・・ありがとう」

カランカラン

男はそれだけ言って出て行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1269k/>

太陽と月と魔法と何かと何か！

2010年10月8日13時02分発行